

十勝圏公共交通共創プラットフォーム(北海道帯広市)

バスターミナルの役割を再定義する共創拠点 「にぎわいターミナル」を整備する

INTERVIEW



ターミナルを共創拠点として整備

北海道帯広市の郊外に位置する大空団地では、開発当時1万人近くあった人口が4200人まで減少し、高齢化も進行している。一方、団地内で買い物ができる場所がコンビニ、クリニックともに1軒のみで、車がなければ日常生活成り立たない現状にある。

こうした状況のなか、2021（令和3）年度には路線バスが商品を運び、大空団地に到着後、店舗に変身する「マルシェバス」の実証実験を行ったほか、2022（令和4）年にはオンデマンド交通の運行を開始するなど、さまざまな取組を行ってきた。本実証実験では、さらなる「共創」を促すための拠点として「にぎわいターミナル」を整備した。

「従来のターミナルはバスを停める場所でしたが、本実証はターミナルの機能や役割を再定

義する目的があります」（十勝バス乗合課 近藤薫氏）というように、にぎわいターミナルを、デマンドバスと路線バスとをつなぐ結節点であることはもちろん、買い物やコミュニティスペース、さらには医療サービスも受けられる場所としても機能させる。

「バスを使う人だけでなく、地域の人がふらっと立ち寄ってお茶を飲んだり、井戸端会議をしたりというような使い方をしてもらえる場所にしたい。また、マルシェバスのように、人だけでなくモノやサービスも集まるターミナルを目指しています。買い物面では、現在帯広市場と連携した注文販売を行っています。ターミナルに電話で注文してもらって、それをこちらで手配して、到着したらターミナルに引き取りに来てもらう形です。医療機能としては健康相談を実施しています。また、ヤマト運輸と連携

し、宅配便ボックスを設置して再配達を減らす取り組みも行っています。そのほかに、外出を促進するため、サイネージを活用し地域のイベント情報などの情報を発信中です。」(近藤氏)。

8つの分科会が活発に活動

利用状況は比較的良く、物販や宅配ボックスでの荷物の受取など、「バスに乗らない用事」での利用者が見られることは、にぎわいターミナルの目指す姿に合致している。もっとも、すべて思い描いた通りに実証実験ができたわけではない。そのひとつが、ターミナルの設置場所の問題だ。

「実証実験では十勝バスが運営している既存の焼肉店を日中の時間帯ににぎわいターミナルに見立てて使っています。ここはバス停から150mほど離れているので、暖かい場所でバスを待ってもらえるという本来の機能が果たしていません。また、自宅からにぎわいターミナルまでの送迎シャトルも無料で運行していますが、なかなか使ってもらえないという課題もあります。声を聞くと、『無料では申し訳ない』という方が多い。同じ無料でもホテルの送迎のような付随サービスと違って心理的障壁があることもわかってきています。」(近藤氏)。

プラットフォームそのものは活発な運営が行われている。多機能な施設ということもあり、共創パートナーは多く、複数の分科会に分かれ



た活動を行っている。

「8つの分科会が毎週会議を行っており、その内容を共有する全体会議が月1回、さらに運営会議も毎週あり、あっという間に1週間が終わっていく感覚です。プレーヤーが多いのですべての共創パートナーのモチベーションを維持し、それぞれのインセンティブを確保していく難しさは感じています。また分科会ごとに細かいアップデートが常にされているので、それをタイムラグなくどのように住民に伝えるかも課題のひとつです」(KPMGモビリティ研究所 高橋氏)

